

平成30年 8月10日

第163号

NJ 素流協 News

平成30年 8月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館5階)

TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

平成30年度

第1回東北地区需給情報連絡協議会を開催

東北地区広域原木流通協議会(会長・

NJ素流協鈴木信哉理事長)は、平成

30年度第1回「国産材の安定供給体制

の構築に向けた東北地区需給情報連絡

協議会」を7月24日、盛岡市のホテル

メトロポリタン盛岡ニューウイングで

開催し、川上・川中・川下の関係者70

名が出席した。

林野庁木材利用課の河野晃情報分析

官と鈴木会長が挨拶を述べた後、秋田

県立大学の飯島泰男名誉教授が座長と

なり議事が進められた。

▽需給情報の主な報告

林野庁、中央団体、東北地区委員(10

名)から報告があった。

【林野庁】

・林業の成長産業化に向けた改革の推

進について、「サプライチェーンマネジ

メント推進フォーラム」を設置し、川

上から川下までのサプライチェーン構

築のためのマッチングを行っていく。

【日本木材総合情報センター】

・平成29年度の各地区需給連絡協議会

出席者に対するアンケート結果につい

て報告。「大変満足」「満足」が合わせ

て44%、「普通」49%、「不満」6%だっ

た(無回答1%)。

【全日本木材市場連盟】

・7月西日本豪雨災害で、中部、中国、

四国、九州各地で林道崩壊のため原木

が出せない、市場・工場の施設が被災

などの情報が入っている。

【東北森林管理局】

・30年度の素材販売量は72万³m³を計画

委託販売が21万6千³m³、システム販売
が50万4千³m³。

・ニーズの高まりを感じている。伐つ

てすぐ引き渡せるよう概算販売を一部

試行。

・新植は1633ha、苗木332万本

を予定。コンテナ苗の使用は7割、品

質管理が重要と考えている。

【青森県】

・新設LVL工場、バイオマス発電需

要のため素材生産を進める必要。

【秋田県素材生産流通協同組合】

・素材生産業者が夏場に国有林請負に

入るため民間材の流通量が減少。

・国有林材の多くが県外へ移出され、

需給バランスが崩れる懸念。

【NJ素流協】

・システム販売や民有林等素材生産が

順調で流通は安定しているが、カラマ

ツは不足。

・低質材は年々増量傾向にあり、出材

方法の工夫などで立木利用率が向上し

ているが、バイオマス発電所の建設増

で原木不足が続く。

・トラック輸送については、広域流通

の強みを生かして、帰り荷確保で実車



率の向上、過積載問題等業界の問題解決へ取組む。

【山形県木材産業協同組合】

・集成材・合板工場のB材需要の急増で、地元製材向けのA材が不足気味。
・秋までに新しく稼働予定のバイオマス発電所があり、発電用チップ生産の動向が不透明。

【セイホク】

・針葉樹型枠、フロア台板等非住宅分野の新規生産の問合せが増加。
・カラマツ、トドマツ等表面材用原木の集材が厳しくなっている。価格も高騰。

【ウツティかわい】

・外材値上がりに伴って国産集成材の値上げを期待するも、住宅着工に停滞感あり、値上げ要望の雰囲気ない。

・県境を越えて燃料用材調達の動きがあり、需給バランスが崩れる恐れ。

【津軽バイオマスエナジー】

・燃料用チップは地元生産業者等が出資する工場から安定的に供給。

【新北菱林産】

・各所のバイオマス発電所が燃料用原木集荷を開始して以来、原木価格が大

幅に上昇、各チップ工場は計画した数量を集荷できていない。

【岩手県山林種苗協同組合】

・苗木生産には播種・床植え・除草・掘り取り・梱包・出荷と人力が必要だが、高齢化や特定の季節に偏った労働もあり作業員確保が難しい。

・コンテナ苗の生産を増やし、通年で作業できる体制にして、若い作業員を確保したい。

【報告に対する主な質疑応答】

Q. 「林地残材の出材方法の見直し」とは具体的に何をするのか？

A. (N J素流協) 全幹・全木集材や、山元での移動式チップパー活用を試行しているところもある。生産者に対するバイオマス出荷のさらなる働きかけも必要と考えている。

Q. 「いわて森の棟梁」登録のように、県産材の住宅利用を進める仕組みはないか？

A. (秋田県) 木材ポイント事業や県内大学のデザイン・建築専門の学生に対する研修で県産材への関心を高めるよう努めている。

Q. 国のICT推進についてはどのような状況か？

A. 国のICT推進についてはどのような状況か？

うになっているか？

A. 一例として、プロセスサのヘッドから生産の情報発信する装置があり、生産材から流通材の在庫管理等の仕組みについて検討中。

【討議】

需要の増大にどう対処するか、「原木の生産拡大」を論点に討議を行った。

・1人2人の作業員が増えても増産につながらない。5人セットならセットで増えないと。そうすると当然高性能林業機械導入も必要。

・生産事業体への若者の定着率は、高性能林業機械保有台数に比例するとい

う調査がある。造林作業には人が集まりにくい。今後再造林従事者の増員が課題になる。

・トラックは過積載の問題があり、量が積みなければ運賃が高くなる。工場着価格が運賃込みのため、生産費に

わ寄せが来ている。生産費に見合った価格にしないと雇用者を増やせない。

・これまで木材運搬トラックに国の補助金が出ていなかった。トレーラーの導入に補助金を出して輸送量を増やせば、相対的に運賃は下がる。

・バイオマス需給については、生産者は全幹集材、需要者は短尺材を受け入れる体制づくりなど、両者が考えていかなければならない。

・バイオマスを出すために木を伐る人はいない。A、B、C材をバランスよく工場に出せる地域づくりが必要。

・A材の生産については大径材の加工流通の課題への取組みも必要。

・タワーヤード等新しい搬出の仕組みと、トラックが走れる林道の整備が必要。航空業界のハブ・アンド・スポークの考えのように中間工場を利用して、輸送の効率化を図るべき。

・木材価格を上げ、立木価格を押し上げながら林業労働力の再生産をしていくことを業界全体でやっつけていかなければならない。

・生産拡大の課題について様々な面

話がでてきた。今後も色々な立場から話し合いを重ねて、課題解決の知恵を出し合うことが必要。木材の利用と山への還元を一番に考えていきたい。

今回の報告と討議の内容を受けて本年11月頃、第2回協議会を開催する

こととして閉会した。

平成30年度林業経営講座(前期) 「3Dレーザースキャナによる立木計測」

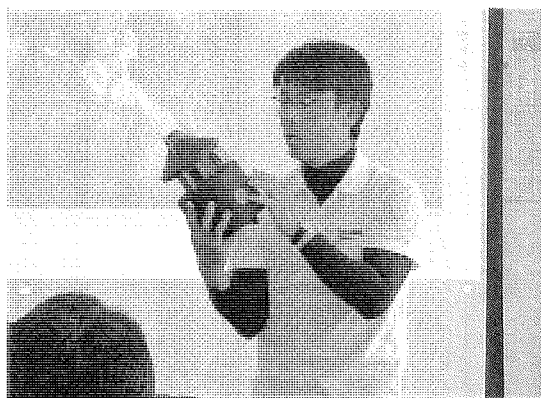
NJ素流協は、7月4日盛岡市において「林業経営講座(前期) 3Dレーザースキャナによる立木計測」を実施し、若手を中心に組合員40名が参加した。過去最多の出席者数となり、関心の高さをうかがわせた。

昨今、森林施業の効率化・省力化・高度化を可能にする「スマート林業」の実現に向け、ICT(インフォメーション&コミュニケーション・テクノロジー)の導入・活用による先進的な取組みが行われている。その一つが今回取り上げた3Dレーザースキャナである。

立木販売や施業の計画に必要な収穫調査は、立木1本ずつの樹種、樹高、胸高直径等について、人の手と目で計測・調査・記録するという、時間と労力を要する作業である。3Dレーザースキャナは、機械から対象物(この場合は立木)にレーザーを照射して跳ね返ってくるまでの時間により距離を、

発射した角度を計測することにより対象物の3次元座標を取得し、「点群データ」として記録する。このデータをパソコン処理すると、自動的に単木の情報を書き出したり、画像として表示したり、森林地図の作図等を行うこともできる。

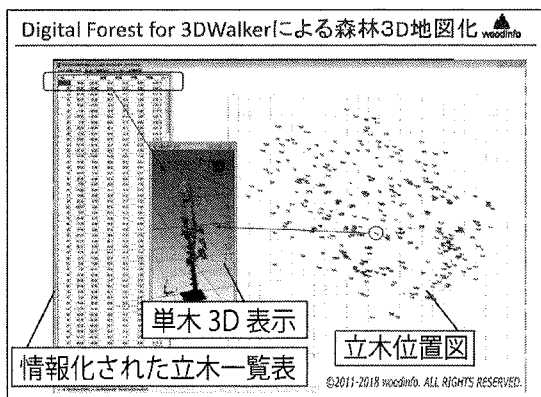
この日は講師として、測量器材・林業資材を取扱う(株)竹谷商事(本社大阪)の土井浩二常務取締役と伊藤崇仙台営業所長をお招きした。予定では、午前



スキャナ本体を手に解説する土井常務

中に組合員所有の山林で実地に計測を行い、午後は室内でデータ処理を実演することとなっていたが、あいにくの雨天のため、屋内で機械の操作や仕組みについて解説いただいた。

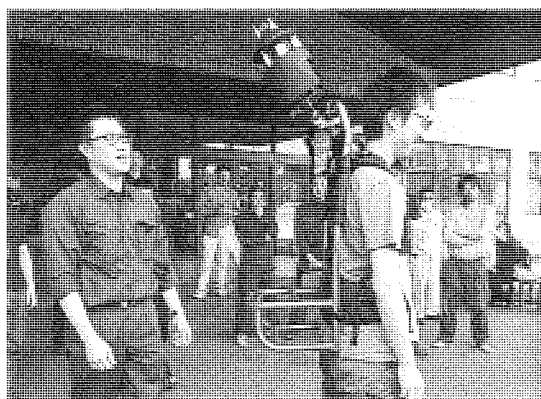
今回紹介したスキャナ「3Dウォーカー」は、背負子に取り付けて、林内を歩くことで計測ができる。計測に要する時間は1haあたり10〜50分。内蔵カメラでカラー画像データも同時に取得する。当面の問題としては、樹種の自動判別ができない、レーザーは雨や霧に影響を受けるため天候によっては計測ができない、本体に放熱口があるため防水仕様ではない、などがあるが、



点群データを書き出した例(研修資料を一部加工)

樹種判別については現在技術開発中のことで、今後の改良が待たれる。このスキャナは米国製で、今年から国内で販売を開始しており、九州を中心に導入が進んでいるという。

この日は併せてドローンも紹介され、上空からの森林の状況確認等への活用について、情報提供をいただいた。今回実施できなかった実地計測については、日を改めて行うこととしており、結果については後日報告したい。◇来る8月24〜25日開催の「いわてスマート農業祭NEO」の(株)竹谷商事ブースで今回の3Dレーザースキャナ等が展示されます。是非お越しください!



スキャナを取り付けた背負子(左は伊藤営業所長)

トピックス

新たな森林管理システム 導入に向け林野庁が市町 村向け説明会実施

5月25日、「森林経営管理法」が国会にて可決・成立した。森林経営管理法は、市町村が中心的役割を果たし、これまでにない手法で森林の適切な経営管理を進めようという新しい制度で、「新たな森林管理システム」と呼ばれる。

来年4月からの導入に向け、林野庁では都道府県ごとに市町村向けの説明会を開始した。岩手県においても7月24日に開催され、県内市町村の林務担当者を中心に百名以上が参加した。

説明会では、林野庁森林整備部近藤美由紀森林計画官が新制度の趣旨や概要、運用の流れや手続きを解説。その上で、運用上解釈や判断の難しい項目について林野庁としての指針や判断基準を示した。

自主的に経営管理が行われていない

私有林人工林が主な対象となる

新たな森林管理システムでは、適切な経営管理が行われていない森林について、市町村がその経営管理の委託を受けることができる。この場合の「適切な経営管理が行われていない森林」について、次のような判断基準が示された。

- ① 森林経営計画を策定していない、
- ② 日常的に巡視や手入れを行っていない、
- ③ 森林組合などに経営管理を委託していない、
- ④ 「経営管理が行われていないおそれがある人工林の基準の目安」に該当、の4項目すべてに該当する場合だ。

④の目安については、造林後の残存本数が著しく少ない、刈り払いや除伐が不十分で植栽木が被圧されている、間伐が不十分で林分が過密化しているなどといった状態が林齢別に挙げられている。

ただしここで注意すべき点として、伐採跡地における造林未済地については対象にならないとしていることだ。林野庁としては、本来は伐採した所有者がその収益をもって造林す

べきであり、新制度の趣旨にはそぐわないとの判断だ。また、主な対象として私有林人工林を想定している。

経営管理の委託には所有者、市町村、関係権利者全員の同意が必要

上記に該当する森林が存在する場合でも、その経営管理を市町村に委託するためには原則として森林所有者の意向表明や申し出が必要となる。また、所有者だけでなく地上権、質権、賃借権などすべての関係権利者の同意が必要。

所有者の意向表明や申し出があった場合でも、市町村は経営管理を断ることが可能だ。断る理由として挙げられた例は、0・3ha以下といった小面積である場合や、主伐により収益を上げたにもかかわらず植栽していない場合などだ。

経営管理の委託期間については、原則として上限下限はない。ただし主伐を行う場合には、その後15年以上管理を行うことが望ましいとする。また経営管理委託の途中であっても、所有者の意向によって取り消すことが可能だ。

森林所有者が不明の場合や経営管理委託に同意の意思表示がない場合

などには、一定の猶予期間を設けて探索や勧告などを行い、森林の多面的機能発揮のためにやむを得ないと判断した場合に限り、みなし同意とする特例を設けた。

対象森林の抽出作業を今年度開始、

書面にて森林所有者の意向を調査
来春の新制度導入を前に、各市町村では今年度のうちに対象森林の抽出作業を始めることとなる。抽出した森林については、所有者に対して書面などで今後の経営管理方法についての意向調査を行う。

経営管理委託の意向や申出があった場合、市町村が「経営管理権集積計画」を作成したうえで所有者との契約を行うという流れだ。

経営管理の結果、原木販売などによる収益が育林などの経費を上回った場合には、特定の算定方法に基づいて所有者に還元される。

林野庁は今後、より具体的な手続き方法を示した手引きを年内中に作成・公表したいとしている。

**講演会「地域から考える
木質バイオマス・花巻編」**

7月14日盛岡において、岩手・木質バイオマス研究会主催の講演会「地域から考える木質バイオマス・花巻編」が開催され、(株)花巻バイオマス エナジー・花巻バイオチップ(株)代表取締役 森井敏夫氏が「花巻の発電事業―木質バイオマス発電の課題と未来像」をテーマに講演した。



花巻バイオエナジー/バイオチップ森井社長講演

同社の発電事業は平成29年2月に開始した。29年度の売電量は約4百万メガワットで、花巻市内の全小中学校と、いわて生協の電気小売事業

へ電力を供給している。燃料用バイオマス材は、素材生産事業者や地元森林組合から低質材を買い入れていくほか、岩手県南地域で発生する松くい虫被害材を燃料として生かす試みも行っている。昨年秋から今年6月までに7500トンを受け入れた。

また、NJ素流協のアドバイスもあり短尺材の受入れも開始した。松くい虫被害木の樹種転換を軸とした市森林整備計画への参画や、熱利用による農業への展開など、地域と連携して展開する事業の未来像を語った。

**鳥取県東部森林組合が
視察のため来県**

鳥取県東部森林組合(鳥取市)の若林哲夫事業部長ほか一行4名が、7月11日当組合を訪れた。経営企画管理部より、当組合の事業概要や当地域の皆伐作業システム、当組合が行っている下刈作業低減実証事業等について説明を行った。その後、組合員所有の低コスト造林実証試験地と、伐採事業現場を視察した。

**球果の豊富なカラマツ
(樹)の情報提供を
お願いいたします!**

近年、カラマツ種子の不足が深刻な状況となっており、当組合では種子確保に協力するため、球果の採取と種苗生産者への提供を行っております。球果が多く付いているカラマツ(樹)で、8月下旬〜9月上旬に伐採可能なものの情報を、至急!経営企画課にお知らせ願います。

【ご注意】

- ①球果の褐変は8月下旬頃からで、それまでは緑色をしており、褐変前の褐色球果は古いもので種子は入っていません。
- ②9月中旬には、球果から種子が飛散し始めるので、情報提供はぜひ9月上旬までお願いします。

経営企画管理部 経営企画課

電話 019-652-7227

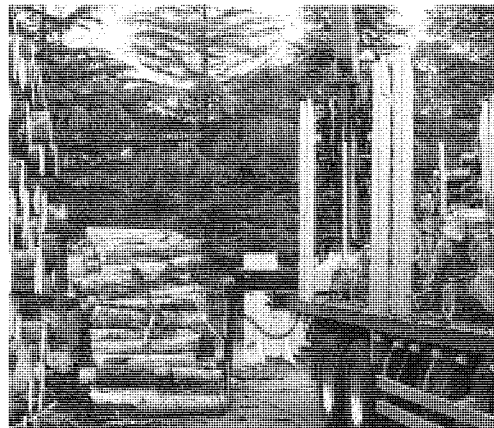
**花巻バイオチップ
短尺材の受け入れを開始**

花巻バイオチップ(株)では、短尺材

の受け入れを開始しました。6月20日(大安)の受け入れ開始日には、さっそく岩手県内からスギの短尺材が25tトラックで1台分納入されました。

短尺材の選択肢があることにより、これまで短コロとして林地残材となっていた根曲がりや根張り部分の有効活用が図られるとともに、2番玉以降の用材率が高まることなどが期待されます。

納入規格は概ね1m前後で、荷卸しの際に通常の原木と同様に極積みできることが条件です。詳細についてはNJ素流協までお問い合わせください。



ちよつと気になる木の話

25

洞爺丸台風がもたらしたものの

—日本林業に与えた影響—

最近、西日本豪雨が あつたように、日本は災害が多い国である。大災害は、その時々で日本の林業に影響を与えてきた。

有名なのは、関東大震災である。この未曾有の大震災で、住宅復興のために大量の木材が必要となり、大規模な木材輸入が行われた。米マツ、米ヒ、米スギ、米ヒバといった名前の米材である。本当の樹種名は学術的には異なるが、国内産のマツ、ヒノキ、スギ、ヒバの代替品としてこの名称がつけられ、今も使われ続けている。

また、阪神淡路大震災後は、木造軸組の住宅は耐震性がないと批判を受け、耐震性のある住宅へと進化するが、最も影響を受けたのは柱、梁の部材であり、無垢材から集成材への移行が一気に進んだ。この結果、ヨーロッパからのWW、RWが大量に市場に出回る現在の状況が生まれ

ることとなった。

さて、日本林業に大きな影響を与えた洞爺丸台風は、戦後復興期に北海道天然林の大風倒を引き起こした。その結果を具体的に考えてみよう。

まず、この風倒木処理による木材産業の大活況がある。針葉樹の中心であるエゾマツ、トドマツは河口に水中貯木され、船で富山等へ運ばれることとなり、後の北洋材製材基地の形成につながっている。風倒処理木を活用したノウハウが、処理終了後同じ場所で、同じ樹種を扱う日ソ貿易への礎となったのである。

優良木だけではないので、チップとしての活用も進む。三白景気と言われたように、北海道の製紙産業の花の時代となる。苫小牧、旭川、江別だけでなく、釧路、天塩、白老と沢山の製紙工場が稼動することとなった。

当時の思い出を○子製紙の人に聞いたことがある。風倒木の仕入検知に山の中の勤務を言い渡され、最寄駅から徒歩で一日かけて赴任すると、

毎日検知に明け暮れ、約束の一年が経過して帰る前日、「もう一年残られたい」との電報を受け涙が止まらなかつた。その頃は徒歩手当があり、一步幾らの手当が出たそうである。ちよつと脱線したが、この時の国有林の処分には、一次、二次、三次処分があり、使える良質材だけ一次で販売し、同じ場所で二次、三次と販売を行った。この三次処分こそが林地残材処理である。最近北海道や九州で行われている林地残材の公売の原点は、この三次処分をモデルにしていると考えられる。

更に、風倒木処理後、紙需要に对应するためグラウンドパルプからサルファイドパルプへ技術開発され、白系原木(トドマツ、エゾマツ)からアカマツ、広葉樹へと原材料が拡大された。本州以南へ製紙工場が立地し、拡大造林に寄与することとなったのである。

次に、広葉樹である。広葉樹利用も急速に進み、旭川が広葉樹産業のメッカになっていく。製材工場も多数立地し、旭川家具も確立された。特に、通称旭川銘協が活況を博し、当時北海

道唯一の原木市場となった。化粧合板工場も数多く立地し、シナ合板は住宅都市整備公団を始めとして定番商品に登りつめ、経木、割箸等様々な工場の立地につながっている。この旭川銘協の中心は昭和木材(株)であるが、昭和木材(株)の高橋家は、元々岩手出身で、一時期樺太で伐採をしていたが、旭川の広葉樹業界で成功を収めることとなった。現在は秋田の大館でもプレカット工場を営んでいるが、北東北への里帰りともいえる。

そして、この風倒木処理後、カラマツ、トドマツ、エゾマツの大造林が行われることとなる。カラマツは途中、カラマツ先枯病が発生し少し造林量は落ちたが、今は成林し、トドマツとともに丸太の本州への移動によって合板、集成材産業を支えることとなっている。そう考えると、洞爺丸台風が林業に与えた影響は大であるといえる。

最後に、この風倒木処理のため、多くの東北人が北海道に渡り、定着している。林業関係者に東北出身者が多い要因となっている。

平成 30 年 7 月 分 の 販 売 実 績

樹種	合板・LVL用			製材・集成材・その他用			計		
	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	11,717	101.5	134.6	13,213	98.9	98.6	24,930	100.1	112.8
カラマツ	3,521	129.2	128.4	380	206.0	60.1	3,901	134.0	115.6
アカマツ	2,128	96.7	82.3	0	*	0.0	2,128	96.7	78.5
その他	0	*	*	573	213.5	*	573	213.5	*
合計	17,366	105.4	123.7	14,166	102.5	100.1	31,532	104.1	111.9

樹種	燃料用		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	8,186	114.1	134.6
カラマツ	2,139	139.7	136.6
アカマツ	325	26.8	28.3
その他	173	88.9	*
合計	10,823	107.0	123.0

樹種	今年度累計			
	合板・LVL用 (m³)	製材・集成材・その他用 (m³)	計 (m³)	燃料用 (t)
スギ	44,347	48,566	92,913	28,736
カラマツ	11,654	988	12,642	6,002
アカマツ	11,176	0	11,176	6,771
その他	0	1,068	1,068	618
合計	67,177	50,622	117,799	42,128
目標達成率 (%)	32.0	34.9	33.2	33.7
計 画 量	210,000	145,000	355,000	125,000

注)*印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【平成 30 年 7 月 の 需 給 動 向】

- 合板用・集成用原木の引き合いも強く、原木不足の状況。(全樹種不足)
- 製材用原木も6月に引き続き、原木不足の状況が続く。(3m・3.65m・4m 全て不足)
- 燃料用原木は出材が順調、各発電所の原木在庫が増加傾向。

耳からウロコ

キノコの呼び名

―最も地域性があるのはナラタケ?―

スーパーのキノコ売り場に行けば、人工栽培キノコが並ぶコーナーが必ずある。シイタケ、ナメコ、エノキ、シメジ等は全国共通名称である。しかし、東北・北海道で最もなじみの深い天然キノコはというと、必ずしもマツタケではない。ナラタケである。でも、ナラタケって道の駅でも売ってる?本当になじみがあっても食べてる?と自分でも疑問になる。

ところが、「モダシ」と言えばわかる。しかしそれも、出身地が違うとわからない。北海道や下北では「ポリボリ」「ボリ」、津軽では「サモダシ」、三八・上北・岩手北部では「カツクイ」、岩手中部では「ポリメキ」、秋田「モダシ」「サモダシ」、新潟「アマダレ」である。こんなに東北の微妙な地域で名前があるキノコは他にはないのかなと思える。名前が統一されないのは、天然物で遠くまで流通しないためかと思うが、秋の味覚の代表格である。

もう一つ有名なのが「ラクヨウ」

である。名前の由来は、字の通り落葉松(カラマツ)に生えることからきており、一般的に使っているが、本当の名前はなんだろうか。正式名称は「ハナイグチ」であるが、そんな風に言う人はあまりいない。ところが、カラマツの本場である長野では「ジコボウ」である。うくん、よくわからない。いずれにしても信州カラマツが拡大造林されて、東北・北海道でも「ラクヨウ」キノコがなじみ深いものに変化したのは間違いないと思う。

秋のキノコで一番と思うのは、個人的にはトビダケであるが、調べてみたら正式名称は違っていた。「トンビマイタケ」だ。おまけに秋田・山形の人以外は見向きもしないと。大ショックである。一度食べてみてはとお勧めしたい。

その他にも「ブナカノカ」と思い込んでいたら「ブナハリタケ」であった。体験での自分の思い込みである。でも、地域で呼び名が違うのは地域の文化と思えば、ナラタケはキノコ文化の象徴であるかなあ。